# おおいたの地震と津波

## ― 歴史が鳴らす警鐘 ―

平成23年3月11日に東日本大震災が起こり、大変な被害がでました。大分においても大津波を伴った大きな地震が慶長元年（1596）、宝永4年（1707）、安政元年（1854）に発生しています。

現在よりも自然に対しておそれや敬いの心が強かった昔の人々は、津波から命を守るために様々な工夫や準備をしました。それは現代の私たちにとっても大切なことです。

### 地震に備えて

**①経験に学ぶ　②防災体制を整える**

宝永4年の地震・津波を経験した佐伯藩では、津波が来た場合の情報伝達の方法を決め、城の門を開いて高台に領民を避難させることも決めていたようです。また、新たに堤防を築いて津波に備えました。

一万一此上大地震・津波等有之候ハヽ、宝永四亥年之御当りを以、大手搦御門開之

### 地震が来たら

**①津波情報を伝達する**

津波が来ることを人々に知らせるために、佐伯藩では大筒（大砲）を打ち、臼杵藩では太鼓を打ち鳴らしました。

**大筒を打つ**

地震沖合高波ニて市中人気不穏候ニ付、先年之御当りを以、津波為相図大筒持せ

**②安全な場所へ避難する**

津波が城下へ押し寄せたとき、佐伯藩では領民に山に登るように命令し、高台にある城に避難することも許可しました。米水津の浦代浦では、宝永の地震の経験を生かし、安政の地震のときには、村の人々はこれまで津波が来ていない養福寺まで避難しました。

一…村中ハ養福寺へ逃れ…

写真は佐伯市米水津の浦代浦です。中央の高台にあるのが養福寺です。

### 未来へ伝える

津波の到達点や被害状況は、村や藩の記録に遺されました。その記録は、私たちの安全のための大切な情報―歴史が鳴らす警鐘―となっています。

大地震・大津波の碑（佐伯市米水津　養福寺）

このパンフレットは、次のようにまとめています。

- 津波の状況を地震ごと、地域ごとにまとめています。
- 津波の記録と解読文、現代語訳を載せています。
- 史料名の下の（　）内に所蔵者を表記しました。

まず、緑色の下地がついた部分を見てください。

大分県立先哲史料館

# 慶長元年（1596）の大地震

**慶長元年7月12日に起こった大地震は、別府湾［日出生断層帯］を震源とする地震で、別府湾沿岸の地域を大きな津波が襲い、多くの被害が出ました。**

## ［別府湾沿岸を襲った津波］

津波は激しい勢いで別府湾沿岸の各地に押し寄せ、府内（大分）の沖ノ浜は何一つ残らず、海になってしまいました。津波の高さは7ブラサ（1ブラサはポルトガルでは1.8m）と伝えられています。浜脇（別府）、日出や頭成（日出）、佐賀関の一部も津波に襲われました。

内陸部にも被害が出ました。高田（大分）では、5km以上も川をさかのぼった津波に襲われ、多くの家が倒れ、人命も奪われました。府内では建物の大半が倒れ、内陸の湯布院では降り続いた雨と、度々の地震によって山が崩れ、村が飲み込まれました。

この地震と津波の様子と各地の被害状況は、府内の沖ノ浜で船宿を営んでいたブラス（Blas）の証言に基づいて、当時長崎にいたルイス・フロイスが作成した報告に詳しく書かれています。

フロイスの報告をイタリア語に翻訳して刊行された書籍

### フロイスの報告の翻訳（要約）

①津波の発生

「夜間に、その村（pueblo）に風が全くないのに、突然轟音を轟かせ、うなりを上げて二、三度波が押し寄せました。津波が激しく波立ったので、村より高く7ブラサ（1ブラサ＝ほぼ1尋、ポルトガルでは1.8m）以上も持ち上がりました。」

「大波（津波mar）は激しい勢いで半レグア（2.8km）まで［陸地に］入り込み、何回も陸地の奥まで達しました。津波が押し寄せたとき、沖ノ浜の村には何一つ残りませんでした。…あの地獄の壷（桶tarro）はすべてを飲み込んで、男も女も子供も老人も、雄牛や雌牛、家々や財産も一緒に持って行ってしまいました。一切が深い海に変わってしまいましたが、あたかもそこには村が何もなかったかのようです。」

②被害状況

(1)沖ノ浜以外の被災地

同じ海岸に沿って沖ノ島に続いている浜沖（浜脇、famaoqi）、鶴（tcuru）、日出（finji）、頭成（caxiranari）、佐賀関の一部が水の下になってしまいました。浜沖（浜脇）ではその村全体でただ一人のキリスト教徒だけが助かった、と言われています。

(2)海港の沖ノ浜に碇泊していた秀吉の貢米を積んだ多数の船と、商人たちの船がことごとく破壊され、あるいは沈みました。

(3)府内の市の戸数5000軒のうち、200軒が倒壊を免れました。避難していた下層民等が戻って来て5000人の住民が住んでいます。

(4)府内の2寺院が倒壊、宣教師がミサに使ったバスティアンの小さな家は倒壊した異教徒達の家の真ん中にあって残存します。

(5)キリスト教徒4000人以上がいる高田には大きな川があり、波が1レグア（5.57km）以上の上流域に入り込んで多くの家が倒壊し多数の人が死にました。

(6)府内から1日行程の由ノ院（由布院）では山崩れで村が押しつぶされ、信仰がさめたキリスト教徒数名を含む殆どの者が死にました。

＊沖ノ浜の位置について

「府内から1レグア（5.57km）の所に多くの船の寄港地および港である海に面した場所があり、それは沖ノ浜（Oquinofama）と称する大きな町（Villa）でした。」と紹介されています。

＊フロイスとは

ルイス・フロイスは、ポルトガル出身のイエズス会司祭で、1563年に来日しました。織田信長や大友宗麟と親交があり、在日中の出来事を記録してヨーロッパに送りました。慶長の大地震の報告もその一つです。また、『日本史』という初期の日本教会史をまとめました。書くことに喜びを感じる人だったようです。

＊津波の高さについて

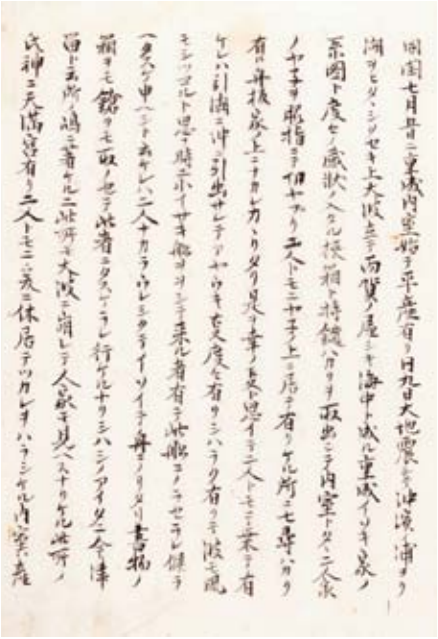
フロイスが記録した津波の高さは7ブラサ（12.6m）ですが、府内の被害状況や、他の記録をあわせて考えると、7ブラサより低かったかもしれません。

## ［府内（沖ノ浜）を襲った津波］

岡藩の船奉行であった柴山勘兵衛重成とその妻、養父の柴山両賀は沖ノ浜に住んでいました。慶長元年の7月、突然大地震が起き、大津波が押し寄せ、屋敷は海中へ沈んでしまいました。勘兵衛は屋根の上に出るために刀で屋根を切り破って上に出ました。そこへ大きな船板が流れてきたので乗り移りましたが、引き潮で沖に流される危険な目にあいました。しかし、波がおさまって船に助けられて今津留（大分）に着くことができました。ところが、今津留も津波に襲われていて、人の家も見えないという悲惨な状況でした。

この府内を襲った津波と被害については、「柴山勘兵衛記」に記録されています。

「柴山勘兵衛記」



**解読文**（／で改行を示しています）

同閏七月五日ニ重成内室始テ平産有リ、同九日大地震シテ沖浜ノ浦ヨリ／潮ヲヒタヽシクセキ上、①大波立テ両賀ノ屋シキ海中ト成ル、重成イソキ家ノ／系図ト度々ノ感状ノ入タル挾箱ト持鑓ハカリヲ取出シテ、内室トタヽ二人家／ノヤネヲ脇指ニテ切ヤブリ、②二人トモニヤネノ上ニ居テ有リケル所ニ、七尋ハカリ／有ル舟板家ノ上ニナカレカヽリタリ、是ヲ幸ノ事ト思イテ、二人トモニ乗テ有／ケレハ、③引潮ニ沖ニ引出サレテアヤウキ事度々有リ、シハラク有リテ波モ風／モシツマルト思フ時ニ、小イサキ船ヲヲシテ来ル者有テ、此船ニノラセラレ候ラ／ヘタスケ申ヘシト云ケレハ、二人ナカラウレシクテイソイテ舟ニノリタリ、書物ノ／箱ヲモ鎗ヲモ取ノセテ此者ニタスケラレ行ケルナリ、シハシノアイタニ今津／留ト云所ノ嶋ニ著ケル、此所モ大波ニ崩レテ人家モ見ヘスナリケル、此所ノ／氏神ニ天満宮有リ、二人トモニ爰ニ休居テツカレヲハラシケル、内室ハ産…（後略）

**現代語訳**

①地震のあと、大きな波が起こって両賀（柴山勘兵衛の養父）の屋敷が波にのまれ海中になりました。

②勘兵衛夫婦は津波から逃れる為に屋根を刀で切破って屋根の上に登り、そこへ、七尋（約13m）の船板が流れ着きました。幸いなことと思って夫婦はこれに乗り移りました。

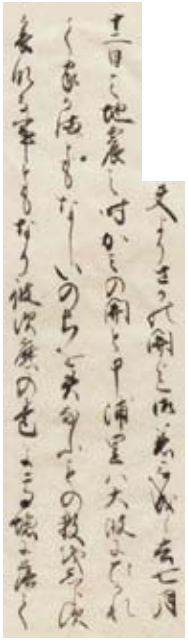
③津波の引き潮によって沖に引出されて、危ういことが度々ありました。

## [佐賀関を襲った津波]

佐賀関は、別府湾に面した半島の北半分（上関、現在の佐賀関港）の被害が大きかったようです。家は流され、命を失った人の数もわからないほどでした。

この被害状況は、玄与（げんよ）という人が、地震が起こった年に鹿児島から京都まで旅をして、その道中での出来事や見聞きしたことなどを記録した「玄与日記」に書かれています。

「玄与日記」（国立公文書館）



**解読文**

夫よりさかの関迄御着被成候、去七月十二日之地震之時、かみの関と申浦里ハ、大波にひかれて家かまともなし、いのちを失なふもの数をしらす、哀なる事ともなり（後略）

**現代語訳**

①（旅の途中で玄与一行は佐賀関に到着しました。）七月十二日の地震の時に、かみの関という浦里が大波にひかれて、家やかまどもなくなってしまいました。命を失った者も数がわかりません。哀れなことです。

＊かみの関とは

「かみの関」については複数の説がありますが、江戸時代初期の絵図に佐賀関半島の北側（別府湾岸）を「上関村」と記し、南側（佐賀関漁港）を「佐賀関村」と記していますので、「玄与日記」に記された「かみの関」は佐賀関半島の北側のことと思われます。

佐賀関（上関）の絵図

寛永海部大分大野三郡図（部分）
（臼杵市教育委員会）

早吸日女神社（はやすひめじんじゃ）

別の史料では佐賀関にある早吸日女神社（佐賀関神社）の鳥居が津波により流されたとあります。

佐賀関（上関）

別府湾に面する現在の佐賀関の様子。
この港の家がなくなってしまいました。

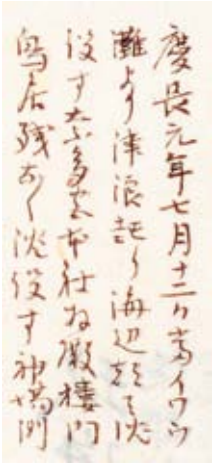
## ［杵築を襲った津波］

杵築では、海辺はすべて水没し、奈多八幡宮の本殿や拝殿・楼門・鳥居までもが水没しました。また、神場洲（現在の住吉浜）の内側は「天下無双」（世の中に並ぶものがない）とほめられていた港でしたが、津波によって被害が出ました。

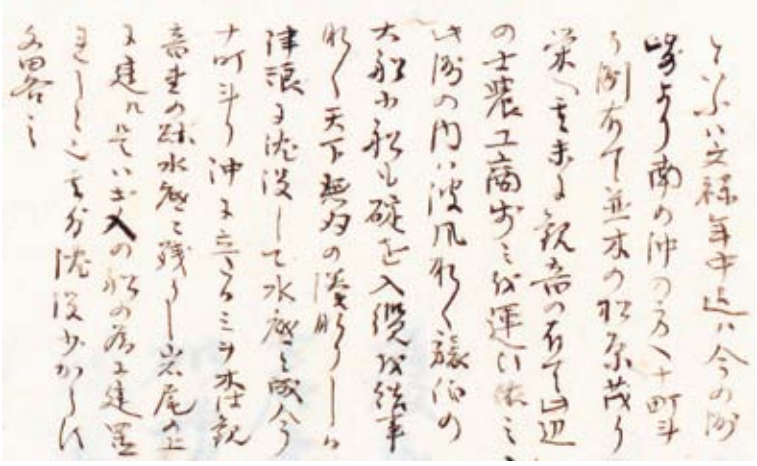
このことは、杵築藩士の是永六雅が中世から近世の杵築の記録をまとめた「豊城世譜」に書かれています。

「豊城世譜　乾」

【1】



【2】



### 解読文

【1】慶長元年七月十二日当イワウ灘より津浪起り、海辺都て沈没す、①奈多宮本社拝殿楼門鳥居残なく沈没す、神場洲といふハ、文禄年中迄ハ、今の洲崎より南の沖の方へ十町斗り洲有て、並木の松原茂り栄へ、其末に観音の有て、此辺の士農工商歩ミを運ひ、依之、此洲の内ハ波風なく旅泊の大船小船も碇を入、纜を結事なく、②天下無双の湊なりしか、津浪に沈没して水底と成、今十町斗り沖に立たるミヲ木は、観音堂の跡水底ニ残りし岩尾の上に建ル、是ハ出入の船の為に建置れしと也、其外沈没少からす

文略之

### 現代語訳

①奈多宮本社・拝殿・楼門や鳥居が残す事なく津波により沈没しました。

②（神場洲の内側は）天下無双の港でしたが津波によって海底へ沈没してしまいました。

**奈多八幡宮**

上は浜より本殿を望む、下は参道より海を望んだ写真です。このように奈多八幡宮は海のすぐ側に建てられています。

**神場洲**（「豊後国志」附図「国東郡」（部分））

## 宝永4年（1707）の大地震

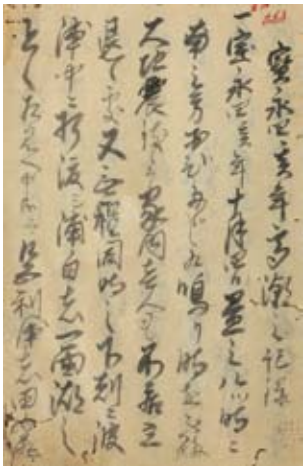
宝永4年10月4日に起こった大地震は、東海道沖（静岡県）から四国沖（高知県）［ほぼ南海トラフ全域］の広い範囲を震源とする、日本最大級の大地震でした。大分県でも県南地域を中心に、大きな揺れと津波により多くの被害がありました。また沿岸の地域以外でも、竹田の岡城では揺れによって城の建物や石垣が崩潰しました。

### ［米水津を襲った津波］

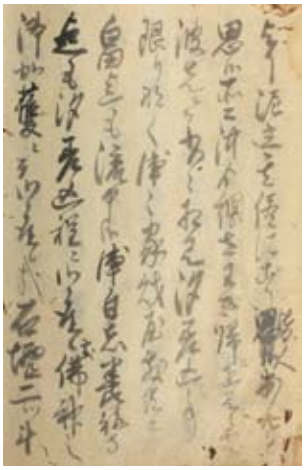
米水津の浦代浦は、強烈な大津波に襲われ、村はほとんど水没しました。津波は高台にある養福寺の石段を二段残す高さ（約11.5m）まで押し寄せました。色利浦でも内陸部まで津波が押し寄せ、ました。この津波の様子や被害状況は、浦代浦の庄屋成松家の「宝永四亥年高潮之記録」に詳しく書かれています。村の記録としてとても大切で、日常からの用心の大切さも強調されています。

宮野浦では、高台にある迎接庵の石段まで津波が来たと伝えられています。

【1】

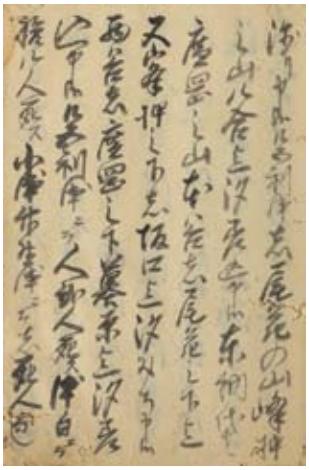


【2】



「宝永四亥年高潮之記録」（個人）

【3】



解読文

【1】宝永四亥年高潮之記録

一宝永四亥年十月四日昼之八ツ時ニ
南之方おびただしく鳴リ、時を不移
大地震致候て、家内壱人も不居立
退候処、又無程同時之下刻ニ波
浦中ニ打渡シ、浦白は一面湖之
ごとく相見へ申候て、色利浦は田の尻
より泥立、其侭にごり皆人出んと
思候所ニ、沖より網さわぎ帰ルを見候処、
波先ニて少々相見、汐差込事
限りなく、浦々家財屋敷共ニ
畠迄も流申候、①浦白は養福寺
迄も汐差込程ニ御座候処、仏神之
御加護ニて御座候哉、石壇二ツ計
残リ申候、色利浦は尾花の山、峰押
之山八合迄汐差込申候、②東網代は
広岡之山、本谷は尾花之下迄、
又峯押之下は坂口迄汐みち申候、
西谷は広岡之下墓原迄汐差
込申候、色利浦ニて人弐人死ス、浦白ニて
拾八人死ス、小浦竹野浦ニては死人なし、

【2】

【3】

現代語訳

①浦白浦では養福寺まで津波が押し寄せましたが、仏や神が助けてくれたのでしょうか、石段二つを残すところで止まりました。

②（色利浦）

東（風）網代は広岡の山、本谷は尾花の下、峰押山の下は坂口まで潮が満ち、西谷は広岡の下墓原まで潮が差し込みました。

（色利浦については津波到達点と逃げた地点が混在しているようです。）

養福寺

石段は当時の物ではありませんが、昔と変わらない位置にあります。青いラインが津波到達地点です。

津波到達点

米水津・浦代浦

中央の高台にあるのが養福寺です。青いラインが津波到達地点です。

←津波到達点（海抜5.7m）

**迎接庵**（こうしょうあん）

迎接庵の石段には、村の伝承をもとに宝永４年の津波が、ここまで来たと刻まれています。

**宮野浦　遠景**

宮野浦では迎接庵（こうしょうあん）の石段まで津波が来ました。

## 【佐伯城下を襲った津波】

津波は７回も佐伯城下へ入り込みました。何度も押し寄せたのです。大手前では、津波の高さは５尺（約1.5ｍ）で、他の場所では９尺（約2.7ｍ）～１丈（約３ｍ）の所もありました。そのため、藩は家臣や町の人たちに山に登るように命令し、高台にある城内へ入ることも許可しました。津波による死者は、町人が４人、海辺の者が18人でした。

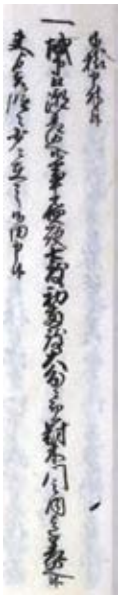
津波がおさまった後、藩は大土手（堤防）を築くことを命じました。

この津波の様子と藩の対応、被害状況は、「温故知新録」（おんこちしんろく）の中にある、「高慶公御手日記写」（たかよしこうおんてにっきうつし）と「御祐筆方覚書写」（ごゆうひつかたおぼえがきうつし）「諸旧記」に詳しく書かれています。

**「高慶公御手日記　写」**（「温故知新録」、佐伯市教育委員会）

【1】

【2】

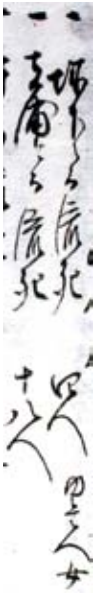


【3】写真略

**「御祐筆方覚書　写」**（「温故知新録」、佐伯市教育委員会）

【4】

【5】



**解読文**（／で改行を示しています）

【1】（宝永四亥年十月四日）

一今午ノ下刻、地震度々甚強く有之、外記・金兵衛・六郎右衛門江申付、其外／用人共郡代共江も申付、怪我人無之様随分可申付旨申渡候、地震止／候と追付①高潮城下江押込候故、家中町等之もの男女共ニ山ニ上リ候／様申付、城内江も無遠慮候間、勝手次第何方江成共参、怪我無／之様、火之元念入可申付旨役人共江申付候、尤今晩なとハ城内其外共／勝手次第ニかこひ申付、当分皆々差置候様ニ早速粥等申付給させ候様申付候、

【2】

一②城下江潮差込候事昼夜七度、初両度大分ニて冠木門之内迄差込候、／夫よりは段々少ニ在之候由申候

【3】

覚

一城内差て破損無之候

一侍屋敷末々之家迄余程之及破損候

一養賢寺大破、其外寺々余程損し候

一両町所々余程及破損候

一在浦家数四百八十六軒震つぶし又は波にとられ候

一田畑高二千四百六十四石八斗余、在浦永荒当荒両様ニて損毛

一城下初領内方々地ゆりハり申候

一城下土手崩長百五十九間余、石垣百廿九間

一城下橋数大小十七ヶ所、いぶ二ヶ所

一新地土手五拾七町余浦方

一塩堤百五十町余浦方

一在浦所々山崩大小拾二ヶ所

【4】

一③城下江押込候波之高サ九尺五寸余、所々不同（十月九日）

一④大手前ニて高波高サ五尺、所ニより九尺壱丈

【5】

一⑤城下ニて流死　四人内壱人女

一在浦ニて流死　十八人

**現代語訳**

①津波が城下へ押し寄せて来るので、家臣や町の者で男女共に山に登るよう言いなさい、そして、城内へも遠慮なくどこでも怪我が無いように登ってきなさい。

②城下へ津波は昼夜合わせて七度、初めの波は強く冠木門（大手門）の所まで押し寄せ、それから段々と波は小さくなっていきました。

③城下へ押し寄せた津波の高さは九尺五寸余、場所によって異なる。

④大手前では津波の高さは五尺（約1.5ｍ）で、場所によっては九尺（約2.7ｍ）～壱丈（約３ｍ）です。

⑤城下での溺死は四人で内一人が女性でした。在浦（沿岸の村）での溺死は十八人でした。

佐伯城　大手門前

大手門は残っていませんが、中央の横断歩道の辺りにありました。背後の山が城山です。

「諸日記」（「温故知新録」、佐伯市教育委員会）

解読文

一宝永四亥年十月四日、①佐伯表大地震ニて高浪
御城下迄打込申候、依之同年本町江舛形より臼坪
蟹田迄新規ニ大土手被　仰付、土手下大明神松ヶ鼻
江之本道致出来候、先年出来之大明神江之道筋
右高浪ニ破損、其後享保中修覆被　仰付候

現代語訳

①佐伯は大地震により津波が城下へ押し寄せました。これにより宝永四年、本町に枡形より臼坪蟹田までの間に新規に大土手を作るよう命令し、土手下の大明神松ヶ鼻へ続く本道が出来ました。

佐伯城下町　絵図

史料に出てくる場所等を絵図に表記しました。位置関係はこのようになります。

馬場の堤防

宝永４年に築かれた大土手は残念ながら残っていません（217号線沿い）。

しかし、佐伯鶴城高校とグランドの間に同じ時期（享保４年）に築かれた土手があります。

## [臼杵城下を襲った津波]

祇園洲・海添町は、家の床上より3～4尺（約1m～1.2m）潮が上がりました。当時すぐ側が海だった祇園洲や海添町では、人の高さぐらいの津波が来ました。また、海添川・鑪河内・南津留・荒田川・北津留・北ノ川・末広・革道辺りまで海水が溢れ、溺れて死んだ人の数もわからないくらいでした。南津留は臼杵石仏の近くで、海から離れた所です。津波は沿岸部を襲っただけでなく、川をさかのぼり、内陸部にも被害を与えました。

船で逃げようとした人もいました。しかし、溺れて死んだ人がでたので、これ以降地震の時は、船で逃げる事が禁止されました。

臼杵藩ではこうした被害を防ぐために、太鼓を打って津波が来ることを人々に知らせました。

このような臼杵の津波の状況、被害、対策については、加嶋弥平太が作成した「温故年表録」や臼杵藩の「日記分類頭書」に記録されています。

「温故年表録」（臼杵市教育委員会）

**解読文**

十月四日未ノ上刻大地震アリ、
半時計過ニ山潮湧キ出テ津浪
大地如ク覆カ鳴動ス、①祇園洲・海添
町家共ニ床上ヨリ潮ノ高事三四尺
余、海添川・鑪河内・南津留・荒
田川・北津留・北ノ川・末広・革道辺
潮溢テ溺死者不ス知員ヲ
船ニ乗リ船嶋逃退者溺死ス、掛町
平七母下女一人、同町清兵衛下女一
人、同町市右衛門妻、同町清八妻、
同町又右衛門妻等六人、横町
吉兵衛母同人妻同娘二人等
四人、掛町問屋勘兵衛客船、肥
後領一尺屋利右衛門船三人乗
破船、旅二人、府内ノ商人、佐伯ノ商人
合テ十五人船嶋ニテ溺死ス、
②右ニ付、以来地震之節、船ニて立
退候義停止被ル仰付

**現代語訳**

①祇園洲・海添町ともに家の床上より三、四尺（約1m～1.2m）潮が上がりました。海添川・鑪河内・南津留・荒田川・北津留・北ノ川・末広・革道辺まで潮が溢れ、溺死者の数もわかりません。

②（船で逃げて溺死した者がでたので）、これ以降地震の時は、船で逃げる事を禁止します。

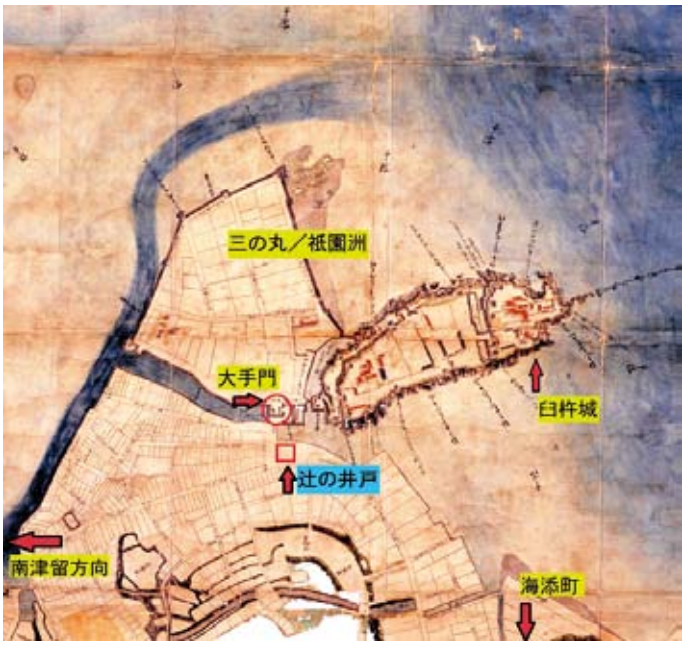
「日記分類頭書」（臼杵市教育委員会）

**解読文**

一①大波ニ付、相図ニ大鞁打候事

**現代語訳**

①大波が来たので、合図として大鞁（太鼓）を打つ。




臼杵城下町　絵図（部分、臼杵市教育委員会）

海添の町並

南津留（臼杵石仏の近く）

## 【府内・杵築城下を襲った津波】

府内（大分）は、大地震によって城や家臣達の屋敷など、建物が壊れる被害が出ました。そして、津波に関しては、大きなものではなかったようですが、2回波が押し寄せました。それで家中（家臣）の妻・子供や町人達は上野原へ避難しました。

杵築も大きな津波ではなかったようですが、6回波が押し寄せ、4回目の波は風雨の影響もあって浜まで潮が上がる危険な状況でした。

府内を襲った地震と津波については「府内藩記録」に、杵築は「杵築町役所日記」に記録されています。

「府内藩記録　甲15」

**解読文**

（10月4日）

一昨四日午之下刻大地震、御城中御天守櫓□□（虫損）
石垣并御家中屋敷町家迄致大破、然所ニ
如元様中嶋御舞台被成御座、今朝迄も少々宛地震
相やミ不申候、依之昨夜は御舞台ニ御寝被為成候
一右地震以後潮時不成高潮両度迄満申候付、被遊
御見合、上原迄も可被成と被　仰出候、然共早速潮引申候、
其後又潮満申候、是又早速引落申候、①依之御か中
妻子共・町人共上野原へ立退申候

**現代語訳**

①家中（家臣）の妻・子供や町人達は上野原へ立ち退きました。

**府内図**（「豊後国志」附図「大分郡」（部分））

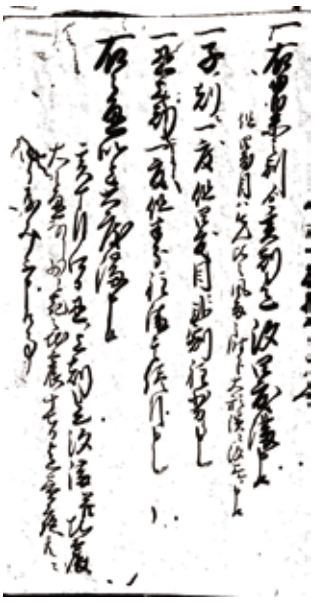
右端下に「此辺旧陸地慶長元年地震之災悉ク海トナル」と書かれています。

**拡大図**

「杵築町役所日記」（杵築市立図書館）

【1】

【2】



**解読文**

【1】一宝永四年丁亥十月四日午ノ下刻但午ノ日也大地震
にて、其後少々宛ゆり申事、其夜中迄十
七八度程ニて御座候、右大地震ニて
（中略）
【2】一右同日①未之刻より亥刻迄、汐四度満申候
但四度目ハ先比之風雨之時分大形浜ニ汐上ケ申候
一②子ノ刻ニ一度、但四度目ニ弐割程劣り申候
一③丑上刻ニ一度、但半分程満、其侭引申候
右之通以上六度満申候
亥十月四日丑ノ上刻迄汐満并地震
右之通なり、少々宛之地震十七日迄、昼夜共ニ
ゆりやみ不申候事

**現代語訳**

①未之刻（昼2時頃）より亥之刻（夜10時頃）までに、波が四度満ちました。四度目のは、風雨により大形浜まで波が上がりました。
②子ノ刻（夜12時頃）に一度、四度目の二割程劣り
③丑上刻（夜1時過ぎ）に一度、半分程満ちてそのまま引きました。

## 安政元年（1854）の大地震

安政元年の大地震は次の様に震源地が分かれます。

○11月4日　遠州灘沖

○　5日　紀伊半島沖から四国沖にかけて

○　7日　豊予海峡（佐賀関と愛媛県 佐田岬の間）

連続的に起こった大地震でした。

とくに5日の大地震では、宝永4年の大地震同様、大分県では県南地域を中心に大きな揺れと津波が襲いました。7日の地震は大きな津波は起きていませんが、揺れは激しかったようです。

### [米水津を襲った津波]

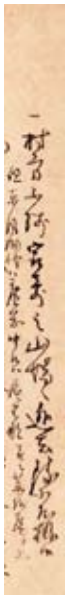
色利浦では満潮時の海面より約2.7mの高さの津波が押し寄せました。津波は数度押し寄せたようです。最初の津波は、元屋敷水神前までと東風網代の太七方前まで到達したと記録されています。元屋敷にあった大庄屋の屋敷は宝永4年の津波で流されたので、高台へ移していました。そのためこの地震では大庄屋の屋敷は床下浸水で済みました。

浦代浦では、女性が一人家に服を取りに帰ったため溺死しましたが、他の村人たちは宝永4年の経験を活かして養福寺へ避難しました。

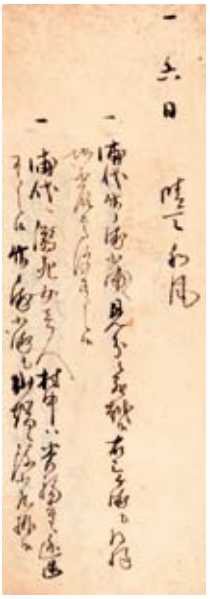
こうした状況については、色利浦の塩月家が記録を残しています。

【1】「嘉永七年甲寅年十一月　色利浦文書」（個人）

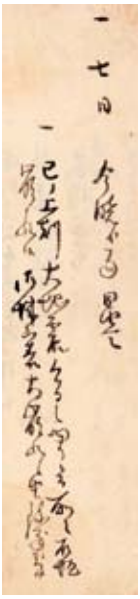
【2】



【3】



【4】



**解読文**

【1】
一　四日　辰下刻　地震　潮満干数度有之
一　五日　甲（申）下刻　大地震　高潮　度数不詳
①色利浦平生満潮より九尺
壱番潮元屋敷水神前
東風網代太七方前迄
②大庄屋所床下迄、畳濡不申
荷物後ノ山へ持運ひ、大庄屋、皆合、召仕之者
男女四五人相残、山へ致小屋掛居候、家内小供
ハ西谷孫右衛門方へ逃行候

【2】
一　村方不残最寄之山端へ逃去、致小屋掛候
但、東風網代ハ廣岡、中江ハ尾はな并ニ薬師庵ノ上
（中略）

【3】
一　六日　晴天北風
一　浦代・竹ノ浦・小浦へ見分ニ罷越候、右三ヶ浦も同様
地震高汐有之候
一③浦代、溺死女壱人、村中ハ養福寺へ逃れ
（中略）

【4】
一　七日　今晩より雨曇
一　巳ノ上刻大地震、今日之ゆりニて、所々石垣
崩れ候、御城山表大崩れ候由、致承知候

**現代語訳**

①色利浦では平常の満潮より九尺（約2.7m）高い津波でした。一番目の津波は元屋敷水神前まで

と東風網代の太七方前まで到達しました。

②大庄屋の屋敷は床下までの波で、畳は濡れませんでした。

③浦代浦では、女性が一人溺死しましたが、村中の人々は養福寺へ避難しました。

**柏之浦**

村の伝承で藻が引っ掛かったと言われる楠木（当時の楠木ではなく、同じ位置にある楠木といわれています。）

**大庄屋屋敷跡辺り**（安政の頃）

## 佐伯城下を襲った津波

地震が発生した後、沖合が高波になり、町中で津波が来ると騒ぎになりました。城下町の人々は城山や山ぎわにある藩の米蔵や養賢寺・家臣の屋敷へと避難しました。最初の津波は川をさかのぼり、諸木方（諸木役所、現佐伯セントラルホテル辺り、ホテル前の道は川でした）へと到達し、川沿いの道へとあふれだしました。その高さは約75㎝と、勢いがあれば人が立っていられない程でした。

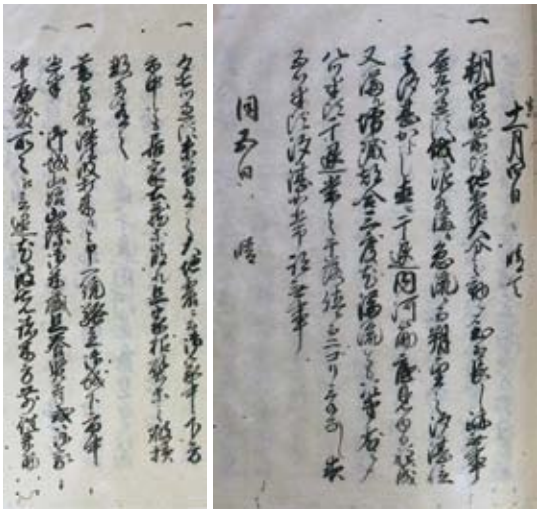
藩は津波への対策として、松ヶ鼻に大筒（大砲）を持たせた見張り番を置き、津波が来たら玉を込めずに空砲で知らせるように命令しました。また、宝永4年の大地震を教訓にして、城を開放して人々の避難場所としました。

宝永4年に築かれた大土手（堤防）の外は「水一面」になったと記録されていますので、大土手が津波を防ぎ、城下は無事だったようです。

一方、震源地に少し近い蒲江浦では、津波が人家を襲い、床上浸水しました。

こうした状況は、佐伯藩の村や浦、町のことを書きとめた「郡方町方御用日記」や藩政の記録「御用日記」に詳しく書かれています。

【1】【2】「郡方町方御用日記」（佐伯市教育委員会）



【3】【4】

### 解読文

【1】十一月四日　晴天

一　朝四ツ時前頃地震大分之動ニシテ至て長し　跡無事

（中略）

同五日　晴

（中略）

【2】一夕七ツ過頃未曾有之大地震ニて御家中下方市中とも居家・土蔵等崩れ且家根・壁等之破損数多有之

【3】一①暮方前津波打来ルと申一統騒立、御城下市中過半　御城山始山際御米蔵且養賢寺或ハ御家中屋敷所々江立退、尤②波先諸木方前往来筋深弐尺五寸程泥水上ル、無程干又満ル、六日暁七ツ頃迄之間都合八度之内初波二度目迄ニて夫より水勢次第ニ劣候、暁方迄地震拾壱・弐度程其中ニ四ツ過・九ツ過両度大分之動明方水ニゴリ気薄く成、地震も間遠ニ相成候ニ付、立退之面々追々帰宅向ノ嶋田畑諸木方近辺迄も両三度程汐込ニ成

【4】一右之通暮方立騒候ニ付、御家老中始御役々火事支度ニて追々登　城之上、小頭③山崎四郎治江御武具方附壱人差添、五拾目筒異風壱挺為持松ヶ鼻江出張、若跡波打寄候ハヽ、知らせのため無玉ニて打候様被申付候、夫より御家老中始御役々会所江相揃四ツ時過退出、御家老中御番頭ハ直ニ引取候、当役御目付は内河筋・諸木方前・住吉辺・船頭町川筋立廻り候処、追々水勢劣為差義無之ニ付夫より帰宅

### 現代語訳

①暮方前に津波が押し寄せると言い、一同騒動になり、城下町の半分以上の人々は、城山を始め山ぎわのお米蔵、養賢寺あるいは家臣の屋敷など所々へ避難しました。

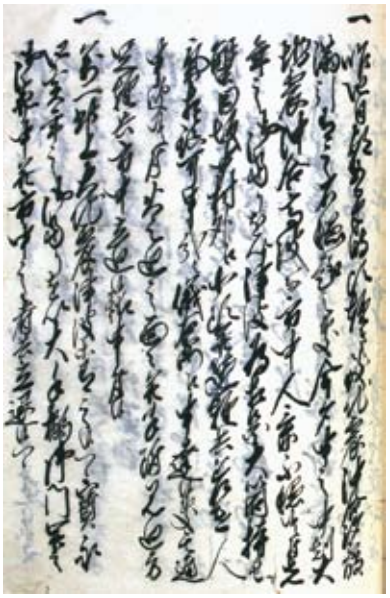
②（津波の）波先は、諸木方（現佐伯セントラルホテル）前の道で深さは二尺五寸（約75㎝）の泥水が上がりました。

③山崎四郎治へ武具方の一人を附けて、五拾目異風筒一挺持たせて松ヶ鼻へ出向かせ、もし津波が打ち寄せたら、知らせの為に無玉にて打ちなさいと命令しました。

佐伯城下町　絵図

「御用日記」（佐伯市教育委員会）

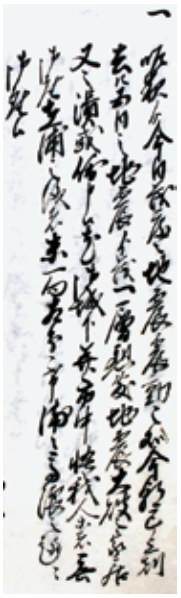
【1】



【2】

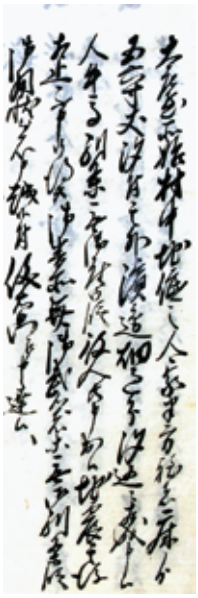
【3】

【4】



【5】

【6】



## 解読文

【1】
一昨四日朝五ツ半時頃軽き致地震、沖合汐不時
満引有之不穏趣之処、今夕申之中刻大
地震、①沖合高波ニて市中人気不穏候ニ付、先
年之御当りを以、津波為相図大筒持せ、
蟹田坂・中村外江小頭并足軽共差遣、人
気相鎮可申哉と儀右衛門江申達候処、其通
申聞候ニ付、火之廻之面々并手附見廻方
足軽共市中立廻候様申付候

【2】
一②万一此上大地震・津波等有之候ハヽ、宝永
四亥年之御当りを以、大手欄御門開之、
御家中并市中之者共立退候ハヽ、
御城内江入可申哉と儀右衛門江申達候処、
其通申聞候ニ付、夫々江申渡候
一③申ノ下刻、俄ニ高汐川内ニ込入、枡方大土手
外水一面ニ相成、市中大ニ致騒動、
御城内且　御城山最寄江皆々逃登、人
気致恐怖候ニ付、私共始列座御役人共早速
川筋江罷越致見分候処、汐折々急ニ満引
有之、度々致地震、益騒立候故…（中略）

【3】【4】
同七日　朝雨天、夫より曇
一昨夜より今日も度々地震震動之処、今朝巳ノ上刻
去ル五日之地震よりも一層烈敷地震、大破之家居
又々潰、或倒申候、尤御城下并市中怪我人等は無
御座、在浦之儀は未一向相分不申、浦々高浪之趣ニ
御座候
（中略）

【5】
一④蒲江浦御番人黒田慎吾より去ル五日夕申ノ下刻
大地震無程高汐、平常より六・七尺余満上り

【6】
大庄屋所始、村中地低之人家半方程は床より
五六寸丈汐付、其外浜辺畑過分汐込ニ相成申候、
人牛馬別条無御座候段役人共申出候、地震其後
相止不申候得共、御番所并御武器等無後別条段
御用状を以申越候付、儀右衛門江申達

## 現代語訳

①沖合が、高波で、市中の人々が不安なので、先年の対応をもって、津波の合図として大筒を持たせ、蟹田坂・中村外へ小頭と足軽を差し向けました。

②万一大地震と津波があるならば、宝永四亥年の対応をもって、大手と搦手の門を開き、家中ならびに町人の者達が逃げてくるならば城内へも入れなさい。

③申ノ下刻（4時過ぎ）、にわかに津波が川内に入り込み枡形・大土手の外は水一面になり、市中は大騒ぎになりました。

④（蒲江浦は）五日夕申ノ刻（4時頃）に大地震があり程なく津波、平常より六、七尺余（約1.8～2m）満ち上がり大庄屋の家を始め、土地が低い場所の家の半分程は床より五、六寸（15～18cm）潮が付きました。

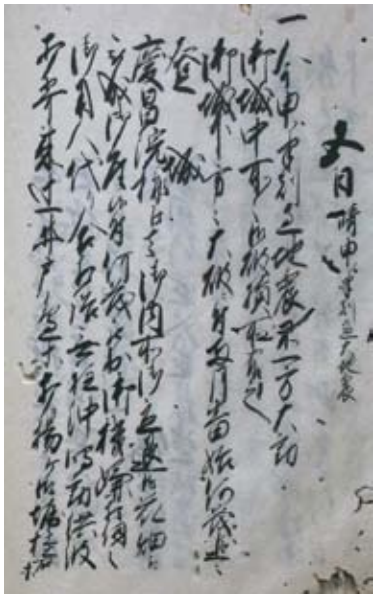
蒲江浦　遠景

## 【臼杵を襲った津波】

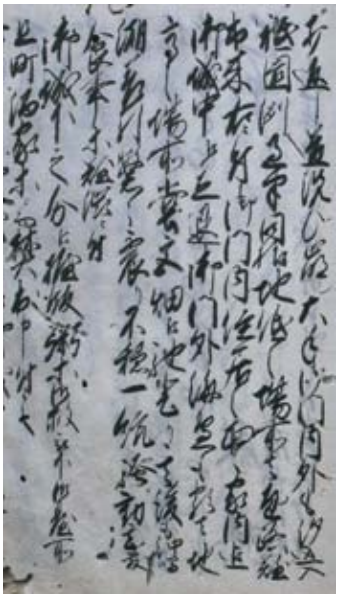
沖で音が鳴り、津波が打ち寄せて来て、辻の井戸辺りや大手門付近（現大分銀行付近）の内外に海水があふれ、祇園洲（ぎおんのす）一帯もほぼ水没してしまいました。そして地面が低いところでは、道を通ることも出来なくなりました。それで、御門（大手門）の中に住む者は城へ避難し、御門の外や海沿いの住人は、高い場所にあるお堂やお宮、畑へ避難しました。

この津波の様子と、被害、避難状況は、臼杵藩の「御会所日記」に記録されています。

【1】



【2】



「御会所日記」（臼杵市教育委員会）

### 解読文

【1】五日　晴申ノ半刻過大地震
一今申ノ半刻過地震不一方大動
御城中所々御破損所有之
御城下方々大破ニ付、両月番始何も追々

【2】

登　城
慶昌院様江は御内所御立退、御花畑江
被成御座候付、何も罷出御機嫌相伺之
御用人代り合相詰、①無程沖鳴動洪波
打寄来辻井戸辺等打揚ケ、御堀桂石等
打返し道洗ひ崩シ、大手御門内外も汐込入
祇園洲過半同様地低之場所は通路難
出来、②右ニ付御門内住居之面々家内迄
御城中江立退、御門外海辺之類は地
高之場所堂・宮・畑江馳登り、其後も沖鳴
潮差引繁々震り不穏、一統騒動甚敷
食事等難渋ニ付
御城下之分江握飯・粥等御救被下、御台所
且町酒家等ニて炊出申付之

### 現代語訳

①程なく沖が鳴動して津波が打ち寄せて来て、辻の井戸辺りなどに洪波（津波）打ち上げ、堀の桂石などに打ち返して道を洗い崩し、大手門の内外へも押し寄せ、祇園洲の半分以上も同様、地面が低いところでは、道を通ることも出来ません。

②それで、御門内に住居がある者は家内までお城の中へ避難し、御門の外と海沿いのものは地高き場所にある堂・宮・畑へ登りました。

※（辻の井戸・大手門・祇園洲などの場所は7頁の絵図を参考にして下さい）

臼杵城

祇園洲　遠景

臼杵城より現在の祇園洲を望む。

辻の井戸

## 【各地を襲った地震】

府内では潰れた家が勢家・生石・駄原でおおよそ２００軒くらい。即死は６人、怪我人は数知れず。柳町では潰れた家が２軒焼失しました。別府は５、６軒潰れた家があり、萩原は大きな被害があり、長久寺も潰れました。乙津の後藤今四郎（碩田）の妻と娘が亡くなりました。鶴崎でも大きな被害がでています。

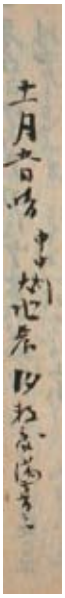
杵築では十一月五日と七日に被害があり、地震の揺れによって人家などが多く倒壊しました。とくに六軒町など海沿いの町が被害が大きかったようです。津波に関しては、杵築に大きな波は押し寄せていませんが、何度も海面が激しく満ち引きを繰り返し、海沿いの人々は恐怖におののき逃げ惑いました。

こうした被害の状況は、「広瀬久兵衛日記」、熊本藩士の記録「恕齋日録」、「杵築町役所日記」に記録されています。

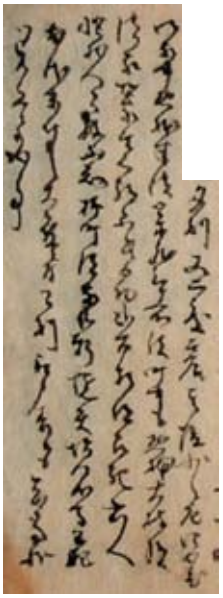
「広瀬久兵衛日記」（廣瀬資料館）

【1】

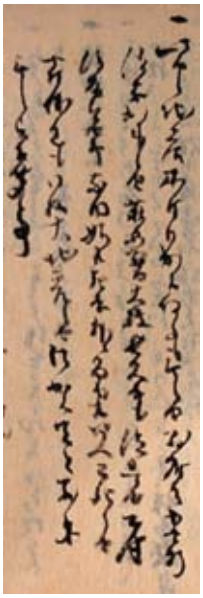
【2】



【3】



【4】



### 解読文

【1】十一月四日晴　朝五ツ半過　地震暫昼後三度　例刻汐満引去り又八ツ時前　高汐満ル

【2】【3】十一月五日晴申中刻大地震　汐数度満干有之
（中略）
夕刻又二度震其後少々宛四五度
御家中惣体半潰、御米蔵三ヶ所潰、町中も惣体大破損、
①潰家勢家生石駄原迄ニて凡弐百軒程、即死六人
怪我人は数不知、柳町潰家弐軒焼失、増田氏馬即死、
前代未聞の大変ニ付即刻江戸表へも急御用状
御差立ニ相成候事

【4】（十一月六日）
（中略）
一②此節之地震木付日出は何事も無之由、別府は五六軒潰家出来候由、萩原別て大破、長久寺も潰れ候由、乙津後藤今四郎家内娘共死去、外ニ角力共四人即死の由
鶴崎辺も同様大地震の由、佐賀関は別条無之旨相聞候事

### 現代語訳

①潰れた家が勢家・生石・駄原でおおよそ二百軒くらい、即死は六人で怪我人は数知れず、柳町では潰れた家が二軒焼失しました。

②この地震で、杵築・日出は何事もなく、別府は五、六軒潰れた家があり、萩原は別して大破、長久寺も潰れました。乙津の後藤今四郎（碩田）の妻と娘が亡くなり、角力取四人も即死しました。鶴崎辺りも同様に大地震、佐賀関は別条ないと聞いています。

「恕齋日録」は十一月五日～七日の現代語訳（要約）のみ紹介します。

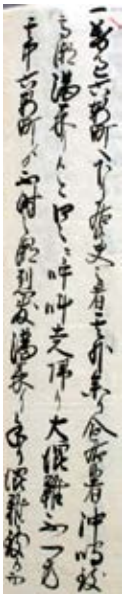
五日　晴　夕方七ツ半頃から揺れ出し次第に強くなりました。
熊本藩内で倒家があり各地で被害、圧死総数四人で、内国中で一人、鶴崎では三人。
鶴崎にある熊本藩御茶屋の玄関や太鼓櫓等が壊れました。報告では圧死二人、怪我人は沢山おり、各地の状況は野津原は軽く、高田山奥では家から逃げ出す程も無く、関手永も同様でした。また臼杵城下に高波が起こり、家が潰れ城にも被害がありました。
十余度余震、一度強い地震が起こりました。
六日　小雨　今朝五ツ半過四ツ前に大地震、五日の地震よりは少し軽くゆれも短かい。
鶴崎からの報告では、朝五ツ半頃二度揺れたが格別強くはなく、五ツ半過ぎ頃に大地震。高田山奥軽く、関も少し軽く、野津原は御茶屋の柱が狂い梁等が損じました。三佐の奉行は千歳の山に登り、男女も残らず登りました。佐伯では高潮が平常より一丈八尺余り高い高潮が襲いました。
七日

府内図（「豊後国志」附図「大分郡」（部分））

「杵築町役所日記」（杵築市立図書館）

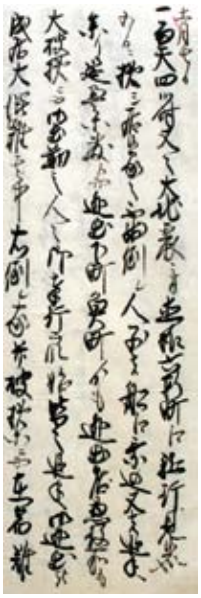
【1】

【2】



【3】

【4】



解読文

【1】十一月四日
一今朝四ツ前少し地震
同日
一①今朝之汐四合程干退候時分、俄ニ烈敷満返り大潮のごとくたゝへ、直様干退候条、珎事之由、船持共より承り候ニ付留置
十一月五日
一七ツ半時大分手強地震致候ニ付、谷町より下震強之趣ニ付見分ニ出懸ヶ候処、…（中略）

【2】一暮過六軒町へ下り居候夫之者、其外参り合居候者、②沖鳴致高潮満来り候と口々ニ呼斗、走帰り大混雑不一方、其中六軒町より不時之潮烈敷満来り、…（中略）

【3】同日
一五ツ時分六軒町見廻り、倒レ家并半倒レ其外大破之家々、婦人老人小児とも如何致居候哉承り調候処、大躰は船々江乗せ置、又は懇意之先へ参り居候旁、先折合居怪我人は弥以壱人も無之趣申出候
同日
一同夜地震少々ツ、八九度斗③夜明迄潮満干五度有之、差引共至て烈敷候事
十一月七日

【4】一雨天、四ツ時又々大地震ニ付直様六軒町江駈行見候処、五日ニ損シ居候家々不残倒レ、人別は船江乗込又は追手へ参り、筵畳等敷候て逃出、下町魚町よりも逃出居、惣役所も大破損にて御出勤之人々御奉行衆始皆々追手へ御逃出被成居大混雑（後略）

現代語訳

①今朝の潮は四合ほど潮が引き、俄に激しく満ち返り大潮の如く海面が上昇しました。
②沖鳴りがして高潮が満ちて来ると口々に叫び（中略）その中、六軒町より思いがけない程の潮が激しく満ちてきました。
③夜明け迄潮の満ち引きが五度あり、満ち引きいたって激しいです。

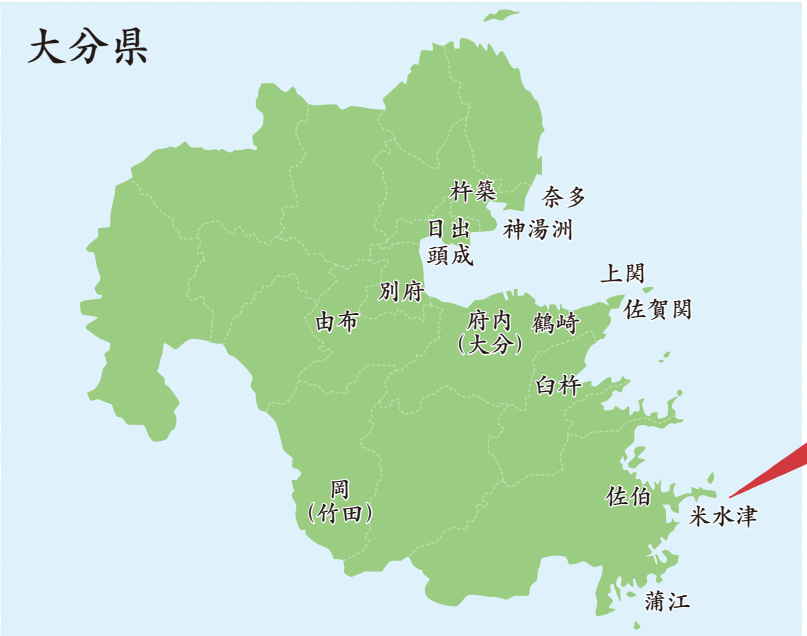
杵築城下町図　（「豊後国志」附図「速見郡」（部分））

杵築城　遠景

六軒町　遠景

写真の真ん中あたり川沿いの町が六軒町です。

## 地震・津波関係地図



米水津湾沿岸と龍神池

## 古文書に記された津波被害箇所と津波高

## 龍神池が語る津波

龍神池は鶴見半島の真ん中あたり、南に面した米水津の間越という場所にある池（海跡湖）です。龍神池の底を掘って調べたところ、驚くような事がわかりました。今から３３００年の昔からの津波の記録があったのです。龍神池は海に接近した場所にあるため、ここを津波が襲った時に、大量の海砂が池の底にたまって地層を作っていたのです。この地層の記録から、池には津波が８回襲来した事がわかりました。３３００年の昔からの津波の跡がのこっているのは全国でもここだけです。

龍神池

高台から見た龍神池と海


# おおいたの地震と津波
## ―歴史が鳴らす警鐘―

平成26年３月発行

編集：大分県立先哲史料館
〒８７０－００００
大分市王子西町14番１号
担当：大津祐司　中西秀樹
松尾節子　椎原理恵

この冊子は「おおいたの災害教訓伝承事業」で作成しました。